

---

# ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ただ、それだけを知りたい

### 【Nコード】

N4776Z

### 【作者名】

カーテンコール

### 【あらすじ】

土砂崩れで死んだ、1人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられていた。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか……。

## 終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だったろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに気分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、1度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前<sup>む</sup>世も現世も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思っている。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になった。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わった。

在り方も変わった。

変わらなかったものなんて、見付かりそうにないくらい変わった。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称ISとも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・ス  
ーツ。

……などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄<sup>モノ</sup>。

「ちいっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ISさえ無ければ、俺のこの第2の人生が狂う事は無かった。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は 否。

居もしない存在に文句を言ったところで、壁に怒鳴るのと同じだ。

そんな無駄な事、してもしょうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのだから。

「……………」

分かり切っている。

俺に出来る事なんて、何も無いってぐらい。

「……………時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと　初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『IS学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう1度、同じ言葉を呟いて。



## 本当の『3人目』

6月終盤。

ここISS学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となった時節。

しかして今日この日は、何事も無く過ぎ去るごく普通の日。

その筈だった。



「転校生？ また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な筈。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかったか？」

「いやそんなまさか」

危ねえ。心を読まれた。

「けど、やっぱり1組なのかな？」

そう言ったのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そうらしい。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だったりしてな」

「それこそ有り得んだろう。男のIS操縦者は、お前と……」

ちらと、教室の一角を一瞥する筈。

そこには、ラウラとセシリアを相手に話しかけているもう一人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆って……そりゃ言い過ぎだぞ筈」

「あのような輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

ブイツと顔を背ける筈。余程あいつが嫌いらしい。

筈だけじゃない。鈴は頷いて肯定してるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるラウラやセシリアも、思いつきり不機嫌を露わにしている。

それでも必死になって話しかけてるあいつが、何だか可哀想になってきた。

よし。ここはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さりげないフォローを

「お前達！ ホールルームだ、さっさと席に着け！」

しようと思ったところで、千冬姉が出席簿片手に教室に入ってきた。すまん、無理だった。

刹那、イグニッション・ブースト『瞬時加速』さながらの速さで席に戻るクラスメイト達。すげえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたあ……」

いつものようにボタンタッチされた山田先生から、いつもと違っ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間削られてたらしい。

「ええっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホー  
ムルームの前に、転校生を紹介したいと思います……もうほんと勘  
弁してください、私の睡眠時間が、ああああ……」

今にも処理落ちしそつだ。惨い。

「転校生だと!?!」

バン、と立ち上がる音。

振り返ったら、後ろの席であいつ……銀崎<sup>ぎんざき</sup>が驚いた風に山田先生  
を見てた。

てか、あいつ知らなかったんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄く詳しく知ってたから、  
そういった情報に関しては通だと思ってたけど。

「席に着け、銀崎」

「っと……すみません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出ていた。

「（しかし本当に1組だったな。もう今更だけど、本当に分散させていないでいいのか？）」

至極まっとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあった気がする。

「……………」

無言の入場。あ、これも前にあったパターンだ。

よし、『P・<sup>パターン</sup>ラウラ』と名付けよう。今決めた。

うんうん、俺って結構センスあるんじゃないか？

「……………」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えている事に気付いた。

何だ？ 今度は『P・シャルル』か？

「……………へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣って。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なら。

その転校生が 俺が半ば冗談で言った通り、『男』だったのだから。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4776z/>

---

ただ、それだけを知りたい

2011年12月16日17時56分発行